

たいよう新聞

462号

2024年7月10日発行

太洋基礎工業 が取り組む

SDGs

エ ス デ ィ ー ジ ー ズ!

今や世界中の企業が取り組みを加速させるSDGs。太洋基礎工業はSDGsとどのように向き合い、何を目指しているのでしょうか。今回お話を伺ったのは、ご自身も積極的に活動している市岡さん。当社が見据えるより良い未来を分かち合いましょう!

長野支店
取締役支店長

いちおか ひでお
市岡 秀夫さん



01 太洋基礎工業の「SDGs」に対する思い

国際貢献への道を日々の活動が切り拓く

SDGsは、2015年9月に開催された国連サミットが発端となりました。国際目標として採択されたことを受け、日本でも社会全体で取り組むべき活動として確立。日本社会の一部を担う太洋基礎工業としては、当然取り組むべき課題であると考えています。

では、「SDGsで何をすべきか?」が、焦点となるポイント。その点においては、すでに私たちが身を置く業界が大きな使命を背負っています。建設業はインフラ整備による街づくり、防災やエネルギー循環など、人々の暮らしに深くかかわる仕事を手がけています。SDGsで掲げる17のゴール。そのすべてに取り組める業界であり、さらには建設業につきまといがちな3K（きつい・汚い・危険）イメージの払拭にも繋がるでしょう。

当社の経営理念がSDGsに直結している

当社の経営理念は、「働いて良かったといえる職場づくり」「社会に存在価値のある職場づくり」という2つ。これらはSDGsが目指す「誰ひとり取り残さない世界の実現」に結びつくものです。建設工事に邁進し、その中で太洋基礎工業の在り方を追い求め、国際社会の一員たる活動を行ってまいります。

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

02 太洋基礎工業が掲げるゴールと取り組み

1.安全な労働環境

ゴール 現場労働災害ゼロの実現



工事に携わるものとして、現場災害はあってはならないことです。そのために、支店のみならず本社からも月1回のパトロールを実行しています。また熱中症対策として、ファンが付属した空調作業服の支給も行いました。その他、技能講習会も定期的を開催しており、安全のための地道な活動を継続中です。

2.環境保全

ゴール 緑化の継続的な拡大



沙漠緑化や森林整備など、当社は日ごろから直接的な環境活動に参加しています。長野県千曲市で行っている「森林の里親促進事業」も、その一例として挙げられるでしょう。私自身もすでに12年間継続して参加している事業です。当日は参加者総勢300名という大所帯。当社と同じ思いをともにするNPO法人沙漠緑化ナゴヤ様と一緒に、千曲市所有の山で苗木1100本の植えつけを行いました。今後も社員一人ひとりの環境に対する意識を高め、具体的な行動に移すことを心がけてまいります。

当社でのこれまでの植樹祭



植樹風景 (2014年)



長野県千曲市と当社との調印式



本社での清掃活動



公園井戸設置



植樹祭 (2018~2019)



長野支店での焼捨山活動



3.国際協力・国際展開

ゴール 諸外国の自立的インフラ整備



当社は国際社会の一員であると自負しています。そのなかでできることは、自社の工法を積極的に国際展開し、インフラ整備の一助を担うことです。実はベトナムの防災堤防早期整備事業に携わっている太洋基礎工業。コロナ禍の中断期間を経て、いよいよ本格的にスタートします。技術指導から始め、最終的には現地が主体となって進められるようサポートする所存です。

4.地域社会への貢献

ゴール 地域的美観維持



当社は地域密着型企业を目指す会社。本社が拠点を構える中川区や警察署、福祉施設などと連携し、清掃を始めとした様々な地域活動を行っています。しかし、アクションを起こしているのは本社だけではありません。例えば長野支店では、焼捨(おぼすて)の水田で毎年田植えから稲刈りまで行い、景観保全に一役買っています。作業するのはもちろん、当社や関連会社の社員。私自身も参加する予定なので、地域の皆さんのために尽力してきます!

03 メッセージ

経営理念をモットーとして、これからも積極的にSDGsに取り組んでまいります。引き続きご支援、ご助力のほど、よろしくお願いいたします!



最前線レポート

能登震災矯正工事

太洋基礎工業が携わったお仕事を紹介します。今回は液状化した被災地が現場。作業スペースが狭く、水没が繰り返される難しい状況でした。1人でも多くのお客様のお役に立つため、作業員が奮闘した最前線レポートをお届けします。

現場概要

施工期間	令和6年5月8日～
場所	金沢市河北郡内灘町
発注者	施主様
元請会社	S社
受注部署	太洋基礎工業株式会社 名古屋支店
施工体制	現場管理者1名、協力会社5名
施工目的	震災で傾いた建物を矯正・修復する工事



名古屋支店 環境開発部

Uさん

今回の工事で心がけていること



現場周辺状況

今回の工事の発注者はお客様。そのため服装や言葉遣い、休憩中の会話に気を使っています。また工事車両をいつでも移動できるようにしたり、朝早い時間や夕方は工事音がする作業は避けたりして、お客様の生活を第一に考えています。

現場でのエピソード

被災地には、同じような状況の方が周りに多くいらっしゃいます。そのため「どのように作業するのか」「誰に相談したら良いのか」と質問をよく受けました。現場に入るのは危険なため、遠目から簡易的に工事の説明を行ったり、家を建てたハウスメーカーや工務店、大工さんなどに相談することを提案させていただきました。



苦勞した点と乗り越え方

掘っては崩れの繰り返し

今回の現場は液状化した地域。砂地盤で水位が高いため、掘削時に自穴が崩れ、穴が埋まってしまい苦勞しました。昼間は発電機を使用し、5台のポンプで水を汲み上げながらの作業。夜は発電機が止まるため、アパートの電源を使用しました。しかし家庭用の容量のため、2台のポンプを回すのがやっと。朝には半分ほど水が溜まってしまったため、掘削をしながら土留め作業を続けました。

施工完了に向けて

お客様第一の心がけ

被災地だからではなく、どの現場でもお客様第一で仕事をしています。丁寧に作業するのはもちろん、最後の後片付けもしっかりと行い、最後にお客様から「ありがとうございました」と言ってもらえるような仕事をしています。家は、通常であれば人生に一度の大きな買い物。不幸にも家が傾いてしまったお客様に、自分ができることは何でもしてあげたいというのが私の思いです。一件でも多く、一人でも多くのお客様の力になりたいと思い、日々作業にあたっています。

被災地への思い

震災から約6か月。やっと仮設住宅が建ち始めた地域があり、復興までにはまだ時間がかかります。地域によっては、1月1日から何も変わっていないところも。そんななか、他人事のように思っている方が多い気がしてなりません。風化させずに、募金、ボランティア活動、北陸への旅行、北陸のものを購入するなど、周りの方に力を貸していただけただら嬉しいと思います。一人ひとりの被災地への思いが、少しずつ復興に近づくと思っています。

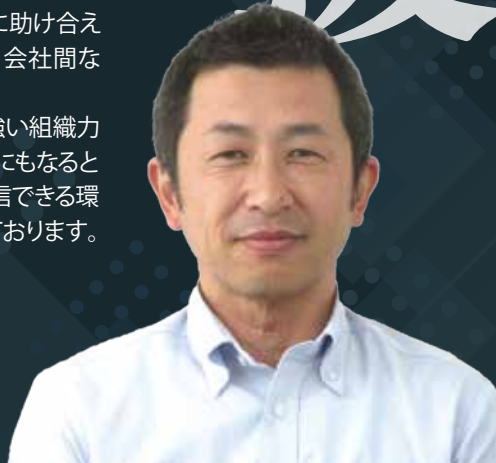
声援

建設業に携わる者として 能登半島の復興は使命

個人力だけでなく、 組織の協力体制が必要

大阪支店への異動直前まで、能登半島地震の災害復旧として構造物の修復業務に注力していました。5月末に石川県の上下水道はほぼ復旧しましたが、災害復旧は進んでいるとは言い難い状況です。全半壊24,000棟のうち、公費解体を申請している住宅が16,240棟。対して工事の進捗は現時点で0.6%です。より被害が大きかった熊本地震が、震災後5か月で公的解体12%を達成したことと比べても、非常に遅れています。遅れの最大の原因は甚大なインフラ被害。被害地域には宿泊施設がなく、都心部から通わなければなりません。金沢から輪島まで片道3時間、往復6時間かかります。道路の状況はだいぶ改善されたとはいえ、まだ手つかずの場所も多く、能登の復興はまだまだ時間を要します。石川県は能登半島地震の復興基金として539億円を拠出する方針を発表しましたが、これが後押しとなり、住宅や建物の復旧が加速することを期待しています。

能登関連の業務は金沢営業所が中心に対応しています。名古屋支店から応援が来ているものの、少数精鋭であるため非常に苦労しています。今後も継続して被災者の方が一刻も早く以前の生活を取り戻せるように尽力する。これこそが建設業に携わる者としての使命の一つと思っています。災害が多い日本では、残念ながら復旧工事が完全になくなることなく、継続すべき事業と考えております。どこで起こるかかわからない災害に対し、個人力では及ばない困難を乗り越えるには、互いに助け合える人間関係が大切です。さらには支店間、会社間など、協業する体制が必要だと感じています。災害対策のみならず、今後の事業にはより強い組織力で対応することが、企業価値を高める原動力にもなると考えております。配属された支店からでも発信できる環境と考え、今後も取り組んでいきたいと思っております。



大阪支店
環境開発部

Yさん

今後の意気込み

この度異動した大阪支店は3回目の赴任になり、新天地ではなく馴染みの地とも言えます。現在に至るまで人脈なども生かせることができるため、大阪支店の皆の力になれると思っています。それも独力でここまで来たわけではなく、皆様のサポートのおかげで今の私があります。引き続き皆様への感謝の気持ちを忘れずに、会社、社会に貢献できるよう、今後も精一杯、邁進してまいります。皆様のご支援、ご指導宜しくお願い申し上げます。

Taiyo Report

たいようレポート

総務部

Kさん



古着deワクチン

「古着deワクチン」 活動実施の背景

2024年の春に従業員の作業服を、新しいものへとリニューアルすることになりました。その際、まだ着られる旧タイプの作業服の処分につづいた際、有効活用を模索し「古着deワクチン」サービスを検討。最終的には、SDGs的な社会貢献を重視する会社の方針と一致したことから実施が決まりました。

全支店で協力し

計30袋の古着を回収

作業服リニューアル後に活動を開始し、結果として、縦・横50cm、高さ75cmの専用回収キット30袋分の古着が集まりました。袋の配布は支店の規模に応じて行き渡るよう、職員数に応じて配布。古着は主に開発途上国で再利用され、専用回収キット1つを利用する



ごとに5人分のポリオワクチンが世界の子どもたちに寄与されます。



読者の皆様へ伝えたい 社会貢献の意義

今回の活動が認められ、当社は「古着deワクチン運営事務局から「古着deワクチンSDGsサポーター企業」として認定を受けました。社員一人ひとりの思いを結集し、今後このような活動に持続的に携わり、会社として社会に貢献していきたいと考えています。